

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：ナラティブデータに対する多角的検討
Author(s)	黒田, 真由美; やまだ, ようこ; 家島, 明彦; 浦田, 悠; 荘島, 幸子; 竹家, 一美; 平川, 祥子; 岩井, 泰穂; 木戸, 彩恵; 塚本, 朱里; 米田, 量; 西山, 直子
Citation	研究開発コロキウム：平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2008): 10-11
Issue Date	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143093
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

ナラティブデータに対する多角的検討

Multiple Analysis of Narrative Date

研究代表者	黒田 真由美 (D3)	教員	やまだ ようこ
研究分担者	家島 明彦 (D3)	浦田 悠 (D3)	荘島 幸子 (D2)
	竹家 一美 (D1)	平川 祥子 (D1)	岩井 泰穂 (M2)
	木戸 彩恵 (M2)	塚本 朱里 (M2)	米田 量 (M2)
	西山 直子 (M1)		

〔研究目的〕

質的データの分析のプロセスにおいて、多様な解釈の可能性を自覚しながらも、自らの解釈の必然性を見出すということが必要となる。また研究プロセスだけではなく、研究法の学びとしても、多様な解釈の可能性を自覚的に検討することが求められる。そこで、本プロジェクトでは、質的研究を行っている学生のフィールドから持ち寄られた生のナラティブデータを共有し、お互いに検討しあうことによって、質的研究の分析のあり方と、その学びについて考えることを目指した。

本プロジェクトは大きく分けると、「データ検討会」と「共同研究会」によって組織されていた。「データ検討会」は、個々人が収集しているデータを示し、データの解釈の多様性や妥当性について検討した。「共同研究会」(通称、なずな研)は、指導教官も含めて実施され、そこで各メンバーの研究の方向性も踏まえながらデータに関する討論を行った。

〔研究経過〕

「データ検討会」においては、学生がそれぞれのフィールドで収集しているナラティブデータを用いて、データの収集プロセスから解釈の方法といった分析のプロセスや、研究倫理について幅広く議論がなされた。研究会は、ローデータを扱うために参加者を限定して行われ、情報の外部流出を防ぐ形で行われた。参加メンバーは、臨床心理学を学ぶ院生や学部生も含まれており、様々な視点からの意見が出された。臨床心理学の院生の参加によって、倫理面に関する議論が活発化するなど、ナラティブデータの分析過

程についてだけでなく、データを扱うこと自体にも意識が向けられた。このような議論をおこなうことは、実際に、フィールドに関わり質的研究をおこなっているメンバーにとっては非常に刺激的な場となったと思われる。

「共同研究会」では、特に修論構想を含め、個人が取り組んでいる研究をさらに展開することを目刺し、発表と議論を重ねた。

〔研究成果〕

データ検討会では、それぞれがデータの分析に関して様々な疑問を抱きながら参加しており、発表者となり、データとその分析過程を提示し、それをもとに議論することによって、多様な示唆が得られた。データの分析に関しては、発表者が分析を提示していても、参加者はそのテーマに縛られることなく、独自の視点からデータについて考察した。例えば、発表者がパターン抽出によって語りの内容の意味連関を検討していても、参加者は語りの形式についての視点や、具体的なライフイベントに密着した解釈の可能性を提示することもあり、発表者に見えるの気づきをもたらしていた。発表者にとっては、自分の行った分析について再検討し、考察を深めるだけでなく、新たな知見を得ることにつながった。また、発表者となることは、抱えている問題についての他者の見解から学びを深めるだけでなく、新たな問題意識を抱く契機でもあった。ほかの参加者にとっては、他者の分析プロセスを知ることにより、ナラティブアプローチについて理解を深めるとともに、多様な視点を培うことができた。別の領域からの参加者が提示する見解は興味深いものが多く、発表者だけではなく他の参加者にとっても学びを深めることにつながった。

また、データの分析方法だけではなく、データの収集方法についても活発な議論がなされた。データの収集するプロセスや対象者との関わり方に関して、臨床心理の院生の意見から議論が展開され、研究倫理の重要性を再認識することにつながった。研究倫理をめぐる問題は、近年多くの研究分野において感心が高まっている問題である。そのため、データの収集から分析、その結果の提示の仕方等、様々な面で研究倫理に関して今後さらに議論を深める必要がある。

また、共同研究会は、特に修士論文に取り組む学生の発表を中心として行われた。そして、発表者の問題意識に沿うかたちでデータの収集方法や分析、結果の提示方法に関して議論がなされた。そして、その成果の一端として、論文にまとめられた。

今後の課題としては、ナラティブが用いられる学問領域は、広がってきており。研究分野や目的が異なると、ナラティブデータを扱う者としてともに議論をしていく場が必要であろう。ナラティブの可能性を追求するとともに、それに伴う倫理観を養っていくことが重要であると考え。フィールドと研究者との対話だけではなく、領域を越えた研究者同士での対話を通して、ナラティブアプローチの可能性をふまえた上で、研究の必然性を見出すことが求められている。